
魔法使い様の恋愛指導

夢月@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使い様の恋愛指導

【Nコード】

N9453V

【作者名】

夢月@

【あらすじ】

魔法使い様は今日も今日とて、恋に迷える女の子を救いに奮闘中。めんどくさがりで、でも世話好きな魔法使い様のお話。

1 店員さんは変人

「あー、雨降ってきちゃった……」

学校帰り、なんと雨が降ってきてしまった。今日はなんて不幸な日なんだろう。学校では遅刻するし、階段では転ぶし、雨は降るし！ 朝は、雨が降る様子なんてなかったので傘なんて持ってきてもない。

仕方が無いので、やむまでそこらへんで雨宿りしようかな。なんてことを思っていた時。

「あー！」

見つけた。私好みのカフェ。真っ白な壁に、窓からのぞける店内は蜂蜜色、椅子はアンティーク系。今日は、少しだけ手持ちもあるし、早速入ってみよう。

「いらっしやいませ……」

店内に踏み入れると、けだるそうな店員さんの声。声のした方向に目をやれば、二十代半ばの店員さんが一人ぼつんと佇んでいた。店員さんの髪の色は店内と同じくらい濃い蜂蜜色だった。よくみれば、かなりの美形。

私が見惚れていると、店員さんは無愛想に席へ案内した。案内されたのはカウンター席。大人しく座り、メニューを開いた。おいしそうな料理が写真が並んでいる。と、その時。

「おい」

呆気にとられた。店員さんに話しかけられた気がするけれど、さすがにお客に「おい」だなんて言わないだろう。

「おい、聞いているのか？」

「へ……？」

聞き間違いではなかったらしい。店員さんは、若干いらつき気味に話を進めた。呆然としている私に店員さんはさらなる爆弾を投下する。

「お前、今恋をしているだろう？」

……え？ 店員さんは、今なんていったんだろう。

「え、え、え。な、い、いきなり何ですか!？」

ようやく絞り出せた声は頼りのないひよろつとした声だった。店員さんは、口角をにっと上げて私の方を見つめた。なんとというか、子供が面白そうなものを見つけた時の目をしている。最近の店は、冗談までしてくれるほどフレンドリーなのか。

「隠さなくてもいい。俺がその恋を手助けをしてやるっ」

「え！ お断りしますっ！」

店員さんの顔がずい、と近くまでよる。灰色の両眼に吸い込まれそうだ。

というか、何故私が片想いの真つただ中に居ることを知っているんだ！

1 店員さんは変人（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます！

初投稿ですが、これからよろしくおねがいます）、、*（

2 店員さんは魔法使い様

「……というか、なんで私が片想いしていることを知っているんですか？」

店員さんは怪しげに笑っている。

「何故、知っているかだって？ そりゃあ、俺が魔法使いだからさ」

何を言っているのだろう、この人は。魔法使いだなんてファンタジーの世界だ。ここは現代日本であるのに、魔法使いなんているわけがない。

「おや、疑っているな？」

「いくらなんでも信じません！ 証拠を見せてくださいっ！」

店員さんは、ずっと目を細めた。木の杖をどこから取り出す。杖を振り上げると、空気が一瞬冷たくなった。そして、目がくらむほどの光が私を包む。思わず私は、目を瞑ってしまった。

「目を開けてもいいぞ」

恐る恐る目を開けると、そこは蜂蜜色の空間ではなかった。

「……、どこ？」

「喫茶店は世をしのぶ飯の姿ってことだ。ここは魔法使いの家、どうだ？ 信じたか？」

見渡せば、そこは一面本棚に囲まれていた。ほこり臭い匂いが鼻につく。部屋に置いてある机も、本や書類やらで埋まっていた。よく見れば、床もあまり足の踏み場が無いほどに散らかっている。一言で言うところの部屋は、汚い。

「……信じました」

観念して言うと、店員さんは深くうなずいた。

正直、店員さんが魔法使いだというのはあまり怖くない。むしろ、どこかでわくわくしている自分が居る。

「で、本題だ。恋を助けてやろうじゃないか」
「遠慮します」

即答で断ると、店員さんは顔を顰めた。だって、なんとなくまだ怪しい気がする。

「何故だ。お前の恋を助けないと、俺も不都合があるんだ」

「……不都合？ 不都合とは何だろう。好奇心がわきあがる。」

「不都合って何ですか？」

「とある人と賭けをしている。とりあえず、一週間以内に、恋を成就させなければこの地を去らなければいけないくなるんだ」

店員さんは、どこか遠い目をしながら言った。そういうことなら、助けてもらった方がいいのかもしれない。

「そういう事情なら……しかたがないですね。助けてください！」
「よし、契約成立だ。じゃあ、お前の片想いの相手とやらを教えて

もらおう」

店員さんの口がきれいに弧を描く。気づけば、雨はもつやんでい
た。

3 魔法使い様はめんどくさがり

自分の恋愛模様を他人に話すってこんなにも緊張するものか。いや、相手が悪いだけだろう。

「私が片想いしている相手は、同じクラスの川上透君です」

「ほおほお。で、どこまで進んでる？」

「……友達です……」

店員さんは明らかに気落ちした様子だった。少しだけ話す程度でもそれなりに緊張するのだ。店員さんはしばらくの間、手に顎をおいて考え込んでいた。その間に、本棚を見回す。見たこともない文字が本に書かれている。

「ふうむ。お前に足りないのは勇気だ」

「当り前ですよ……」

勇気があつたのならとつくのとうに相手に告白していることだろう。

「そこで俺の魔法の出番ってわけだ」

そういうと、持っていた杖を上下に振ってみる。今度は杖先から淡い光がこぼれた。淡い光は一本の糸のように一つにつながり、しまいには輪の形になる。光はしばらくすると消えて、あとには指輪が一つ残った。

「この指輪は真実の指輪って奴だ。これを使えば自分の本心が言えるようになるのだ」

店員さんは得意げに笑った。指輪はシンプルなデザインだけれども可愛いデザインだ。興味深げに見ていると、店員さんは私の指に指輪をはめてくれた。なんだか男の人に指輪をはめてもらうなんてなんだか緊張する。ただ、この指輪って本当に効果があるのかな。

「……本当にこんな指輪で大丈夫なのかな……」
「疑ってたな？」

気付けば自然と口が開いていた。私は急いで指輪を引き抜く。

「ええ、なんでなんで!？」

「まあこんな具合だ。これを使ってまずは相手をデートでもなんでも誘うんだな。ああ、近々祭りがあるからそれにでも誘っておけ」

店員さんは事も無げに言った。確かに便利かもしれないけれど。

「というか、相手と両想いになる魔法ってないんですか？」

「あることにはあるけれど、そんなんで両想いになったって嬉しいか？」

確かに嬉しくはないだろう。私は横に首を振った。それに、と店員さんは話を続ける。

「そういう魔法は準備がめんどくさい」

店員さんはどうやらめんどうさがりのようだ。

4 魔法使い様より友達

店員さんと会って、一日がたった。私はただいま学校に居る。指輪は、念のため鞆の中に忍ばせておいた。

昨日のことが夢のようだと思う。なんだって、魔法使いと名乗る男の人に恋の手助けをもらうのだから。

「あ、ゆかりー？」

「へ、な、なに？」

少し考え事をしていたせいで、友人の呼びかけに反応できなかった。友人の三咲は、お弁当のプチトマトをフォークでつついていた。

「今度のお祭あるじゃない？ あれさあ、いつしよにいこーよ」

今度のお祭り。店員さんが言っていた例のお祭り。

「え、いいけど」

「やった！ けどさー、女二人つてのもつまんないよねえ。こう、青春！ っていうのがしたいねー」

そりゃあ私だってしたい。実は、今まで迷っていた。指輪を使うかどうか。そりゃあ、あの時は気分が舞い上がってたけれども！ 誘ったはいいいけれども断られたらどうしようとか、嫌な方向に思考が向かう。

三咲は私の顔をじっと見つめていた。……なにかついてるのかな？ 三咲は声をひそめてこう言った。

「ゆかりはさあ、川上とか誘わないわけ？」

思わず、卵焼きが落ちそうになった。

「えええつと、誘いたいけどっ」

「え、ならいいじゃん。おーい、川上！ ついでに遠藤！」

たまたま教室に居た川上君と遠藤君を呼びつける。二人は、何の疑いもなくこっちに来てしまった。たぶん、私の顔は耳まで赤いと思う。

「あのさー、今度の祭りの時暇？」

「暇だよ！ すっげえ暇！ な、川上」

「まあ、彼女いないからな」

ちらりと三人をみやれば、屈託のなく笑っていた。川上君はそれは眩いばかりの笑顔を浮かべてらっしゃって、ますます赤くなってしまふ。三人の会話は、一緒に祭りに行こうという形で進められていた。ああ、もうどうにでもなってしまうえ！

「ということ、ゆかり。今週の日曜、こいつらも一緒に行くことになったよー」

川上君の視線がこちらに向く。三咲は、満面の笑顔を浮かべていた。

「楽しみだね」

川上君がそうはにかなでいうので、私の気分はもう天にも昇るような気持ちだった。その後遠藤君が冗談をとばしていたこととか、それに対して三咲が呆れたこととかなんてもう耳に入らなかった。

川上君が私に向かって笑った、その事実だけでもうこの日は十分幸せだったといえよう。

「三咲っ！　ありがとう！」

二人が教室から去ってしまった直後に私はお礼を言った。三咲はいいってことよ！　と、実に豪快に笑っていた。

「まああとはゆかり次第！　祭りでじっくり仲を深めるのもよし、思い切って告白するのもよし！」

「うん、頑張ってみるよ！」

その時、指輪のことなんて頭からすっぽり抜け落ちていた。店員さんに手助けしてもらうよりも、今日の前に居る友人の方がよっぽど頼りがいがあったのだから。

5 魔法使い様はお人よし

ようやく帰る時になって、店員さんのことを思い出した。一応、祭りに行くことを報告しなければならぬだろう。私は、昨日の店に急いで行った。

カフェは昨日と変わらない、汚れない白い壁でどうと構えている。店内は片付いており、どこからどうみても怪しげな魔法使いなどという店には見えないのだ。扉を開いて一歩、足を踏み出した。その時だ。ひゅ、つと音がした。足を踏み出した場所には、あるべきはずの床が無かったのだ。落下している、と認識したのはちょうど3秒後。ひゆるひゆると落ちていく私は、ふわふわのクッションの山に受け止められてなんとか無事だった。

「で、結果はどうだった？」

目の前には、机に頬杖を突く店員さんの姿。相変わらず顔がお美しいことだ。

「一体これは何なんですか!？」

質問を無視して店員さんに怒鳴りかかる。店内に入ったと思ったから落下していたのだ。驚きのあまり心臓が止まってしまっかと思っただほどである。

店員さんは、そんな私に顔色一つ変えず答えた。

「いちいちおまえが来るたびに魔法で案内させるのも面倒だからな。先に店自体に魔法をかけておいた。お前が来たらここに来るように」

「魔法をかけるなら昨日のうちに言っってください……」

「すまない。で、結果は？」

全然謝罪の態度が見られないのはどういうことだろうか。しかたなく私は答えた。

「成功です、ばつちり誘えましたよ。あ、でも指輪はつかいませんでした」

「使わなかった？」

店員さんの片眉が少しだけ上がった。悪いことをしたのかもしれない。折角協力してくれたのに、使わなかったなんて。私は今日の出来ことを短くまとめて話した。店員さんはその間、相槌も打たずに真剣に聞いていた。

「……そうか。じゃあお祭りの日に告白しろ」

「えっ!？」

何でも話が急すぎないだろうか。

店員さんは意地悪く笑った。

「真実の指輪の効果は3回きり。この前、指輪を試しに使ったから残りは2回。告白するには十分だ」

「で、でもいくら告白したからって受け入れてもらえるとは限りませんよ?」

ささやかな反論を試みるが、店員さんは首を横に振った。

「そこで俺の出番だ。相手も祭りに一緒に行くことを約束するなら、少なくともお前のことは嫌っていない。それならば、祭りという舞台を使ってそういう雰囲気をつくりだす。そこでお前が告白すれば相手だって付き合っさ」

「そんなむちゃくちゃな……。それにそういう雰囲気だっ作り出せるかどうかわかりませんし」

「お前なあ……。そのために俺が居るんだろっ？」

そこで言葉に詰まってしまった。確かに、店員さんがついているのだ。頼りになるかどうかはおいという、応援してくれる人が居るのは心強い。私は小さくうなずいた。

「ありがとうございます、本当にすみません」

「いってことだ」

店員さんが私の頭を叩いた。人の良さがにじみ出ているなあ、と心底思う。そんな店員さんの為にも頑張ろうと思った。

5 魔法使い様はお人よし（後書き）

お気に入りありがとうございます）、＊（
亀更新すみません）、；（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9453v/>

魔法使い様の恋愛指導

2011年12月11日17時51分発行